

# 白い馬／赤い風船

★★★★★

★★★★★

2008(平成20)年6月12日鑑賞〈東映試写室〉



「白い馬」監督・脚本＝アルベル・ラモリス／出演＝アラン・エムリー／ローラン・ロッシュ／フランソワ・プリエ／パスカル・ラモリス／ナレーター＝ジャン＝ピエール・グルニエ（カフェグルーヴ、クレストインターナショナル配給／1953年フランス映画／40分）／  
「赤い風船」監督・脚本＝アルベル・ラモリス／出演＝パスカル・ラモリス／サビーヌ・ラモリス／ジョルジュ・セリエ／ヴラディミール・ポポフ／ポール・ペレー／ルネ・マリオン／ミシェル・プザン（カフェグルーヴ、クレストインターナショナル配給／1956年フランス映画／36分）

…… 1950年代、日本には「映画監督」黒澤明がいたが、フランスには「映画詩人」アルベル・ラモリスがいた。50年代の2つの短編には夢がいっぱい、愛がいっぱい！ 映画とは、それを観た観客を感動させる芸術。そのためには、シンプル・イズ・ベスト！ きっと、あなたもそんなことを考え、映画への感動でいっぱいになるはず……。



## なぜ今、『白い馬』と『赤い風船』が2本立てで……？

「おふいす風まかせ 松井寛子」さんからの試写案内のハガキを見ると、『白い馬』と『赤い風船』の2本を一挙上映とあった。「白」と「赤」の2本立てに何か意味があるの……？ そう思って詳しく読むと、両者ともフランスのアルベル・ラモリス監督の作品で、1953年の『白い馬』が40分、1956年の『赤い風船』が36分、両者合わせて76分とのこと。なるほど、だから2本立てかと納得。

最近、黒澤明監督の『椿三十郎』（62年）と『隠し砦の三悪人』（58年）の2本が立て続けにリメイクされたが、それよりさらに古い『白い馬』と『赤い風船』の上映が可能となったのは、当時のフィルムをデジタルリマスターできたため。1953年のカンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した『白い馬』も、1956年のカンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞を受賞した『赤い風船』も、このデジタルリマスター版によって2007年のカンヌ国際映画祭に再び出品されたとのこと。同じ作品が2度も正式出品されるのは映画祭史上初の出来事。そして、プレスシートによれば、「何よりも話題

をさらったのはその少しも色あせない映画の力だった」とのことだが、まさにそのとおり！

## はじめて知った、フランスの「映画詩人」に感服！

昔は映画監督といえど無茶苦茶カッコ良く憧れの職業だった。それは今も同じだが、今は映画監督より「映像作家」の呼び方がもっとカッコいい……？

『白い馬』と『赤い風船』を監督・脚本したフランスのアルベール・ラモリスは1922年生まれだから、『白い馬』は31歳の時、『赤い風船』は34歳の時の作品。そして何と、彼は48歳の時に事故で亡くなったとのことだが、彼ほど映画監督より「映画詩人」という呼び方がふさわしい監督はいないようだ。

日本の絵本『あかいふうせん』は、画家いわさきちひろの熱意によって1968年に出版されたが、そのストーリーの原型はラモリス監督の『赤い風船』にあるとのこと。他方、私の学生時代には、「遠い世界に……」の歌い出しから始まる1969年のヒット曲『遠い世界に』があった。これは大阪出身の西岡たかしを中心としたフォークグループ「五つの赤い風船」の有名な曲だ。また、浅田美代子が歌った『赤い風船』（73年）は、私が司法試験勉強中にもかかわらず知っている大ヒット曲。「赤い風船」そのものは平凡な日本語だが、ひょっとしてこのグループ名や曲のタイトルにも、ラモリス監督の『赤い風船』が影響していたの……？

## よくぞこんな撮影ができたもの……？

『白い馬』の舞台は南仏のカマルグ。主人公は、そこに生息する野生馬群のリーダーである「白いたてがみ」と呼ばれる荒馬。物語の核は、この「白い馬」を捕らえようとする3人の牧童たちと白い馬との闘い。また映画のテーマは、白い馬と心を通じ合う漁師の少年フォルコ（アラン・エムリー）との友情。

牧童のリーダーから「あの白い馬を見つけたらおまえにやる」と言われた（騙された？）フォルコは、その後信じられないような、文字どおり「人馬一体」の行動を見せるのだが、それがハッピーエンドにならないところがこの映画のミソ。イエス・キリストだって、迫害を受けながら生きていけばただのヒーローに終わったはずだが、十字架で磔にされた後に復活したから神の子と認められたもの……？ しかして、白い馬とフォルコの行く末は……？

アラン・ドロンの若い頃を彷彿させる(?) 美形のフランス人の少年アラン・エムリーなら、監督の演技指導によっていかようにも名優になれるかもしれないが、主人公であるあの白い馬を、ラモリス監督は一体どうやって「演技指導」したの……? ①白い馬と牧童たちとの再



© Copyright Films Montsouris 1953

三の闘い、②群れのリーダーの座を奪われた白い馬とニューリーダー馬との白熱の「一騎打ち」バトル、③白い馬とフォルコとの心温まる友情。そんなアクションシーンあり、涙を誘うシーンありの映像を、1950年代によくぞここまで撮影できたもの。それがホントに私には不思議!

## 🎬 シンプル・イズ・ベスト!

現在の映画界最大の話題は、6月21日に公開されるシリーズ4作目となる『インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国』(08年)。その例を挙げるまでもなく、近年のハリウッド大作『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズ、『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズ等を見れば、これでもか、これでもかと金をかけて超豪華なスペクタクルシーンを観客に観せることがベストと考えているよう。『HERO (英雄)』(02年)、『LOVERS (十面埋伏)』(04年)に続く、張藝謀監督の『王妃の紋章』(06年)だってそうだ。

しかし、今から50年以上前の1953年の『白い馬』は40分。『赤い風船』は36分という短い時間だが、その中にシンプルながら見事なストーリーが組み立てられている。また、ヘリコプターによる上空からの撮影など、映像技術的に見てもすばらしいテク



© Copyright Films Montsouris 1956

DVD『赤い風船／白い馬【デジタルニューマスター】2枚組初回限定生産スーベニア・ボックス』発売日：2008年12月12日、発売元：角川エンタテインメント

ニックが駆使されていることがよくわかる。こんな映画を観れば、重厚長大路線を歩むハリウッド大作とは明らかに異質の、「これぞ映画の原点！」というべき真骨頂がきつとあなたにも見えてくるはずだ。そして、その結果「シンプル・イズ・ベスト！」と実感することまちがいなし！

## 🎬 『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』に期待！

1947年生まれの台湾の侯 孝 賢監督ホウ・シャオシェンの代表作は『悲情城市』（89年）。そんな巨匠が、『珈琲時光』（03年）での東京へのアプローチ、『百年恋歌』（05年）での台北へのアプローチに続いて、パリへのアプローチに挑戦したのが、『赤い風船』へのオマージュを込めた『ホウ・シャオシェンのレッド・バルーン』の製作。

これは、オルセー美術館の開館20周年事業として2007年に発足した、美術館が映画製作に全面協力するというプロジェクトの第1回作品監督に、侯 孝 賢監督ホウ・シャオシェンが指名されたために実現した企画。登場人物も、ヒロインはフランス人だが、中国人留学生も登場し、現代のグローバル化されたパリを舞台としてアルベール・ラモリス監督の『赤い風船』へのオマージュを込めた物語が展開する113分の長編映画らしい。今から大いに楽しみだ。

## 🎬 「いやあ、映画って本当にいいもんですね～」

映画が誕生しておよそ110年。キネマ旬報社・キネマ旬報映画総合研究所主催の映

画検定も既に4回を数えたが、「映画とは？」という問いかけは永遠に続くテーマ。無声映画からトーキーへの転換、白黒からカラーへの転換という大きな変化を経た映画は、テレビとの共存という大試練を何とか乗り越え、世界でも日本でも順調に発展している。そんな今、50数年前のこんな名作を観れば、きっとあなたは言葉を失うとともに、あらためて「映画とは？」という根源的な問いに挑戦したくなるはず。

また、『白い馬』のテーマは白い馬と少年との絆、『赤い風船』のテーマは少年が不思議な赤い風船に見る夢だが、それぞれ40分、36分という短い時間の中でそのテーマがしっかりと私たちの心に刻まれるとともに、映画への感謝や感動の気持でいっぱいになるはず。6月10日に亡くなった映画評論家の水野晴郎氏の決めゼリフが、「いやあ、映画って本当にいいもんですね～」だったが、『白い馬』と『赤い風船』を鑑賞した後の言葉としてまさにこれがピッタリ！

2008(平成20)年6月13日記

弁護士 坂和章平



THE MOVIE  
**LAW DE!**  
**SHOW**

『白い馬』『赤い風船』

きょうから梅田ガーデンシネマで公開



©Copyright Films Montsouris 1956

色あせぬ感動を、半世紀後の今！

映画の誕生は、フランスのリュミエール兄弟による一八九五年のシネマトクラフの一般公開。それから約百年、映画の進歩は著しい。そんな今、五十数年前のフランス国際映画祭を席巻し、一九七〇年に四十八歳で死したアルベール・ラモリス監督の名作がデジタルリ

マスター版によって鮮やかに甦った。モノクロの『白い馬』(一九五三年、四十分)は、南仏カマルグ地方を舞台とした少年と白い馬の物語。白いたてがみと呼ばれる美しい野生馬と呼ばれる美しい野生馬は地元の牧童たちと闘い、新リーダーの馬と闘う中で少年との友情を育んでいくが、陸の果てまで追い込まれた彼らは躊躇なく海の中へ。初カラーの『赤い風船』(五六年、三十六分)は、パリを舞台とした少年と赤い風船の物語。ある意思を持ってふわふわと浮遊する赤い風船はいつも少年と一緒だ。その仲を妬んだいた

中で言っており、「映画は観るもの、語るものには非ず」を鮮やかに示した『白い馬』と、映画による目で楽しむ童話『赤い風船』に感動したい。そうすれば、「いやあ、映画って本当にいいもんですね」という故水野晴郎氏の決めゼリフが口をついて出るはずだ。

ずらっ子たちが石を投げ始めたから大変。石が当たって風船はしぼんでしまい少年は泣き出すが、そこで起った奇跡とは？

両者とも悲しい結末だが、ゼリフのほんとなんて美しい叙情的なシーンの連続に圧倒。また、半世紀前にオヤジこんな発想と構成そしてこんな撮影ができたものだぞと感動！

この映画に関してはぜひパンフレットの購入を！ 故渡川長治氏がその

大阪日日新聞 2008(平成20)年7月26日